歴史地震
第 22 号(2007) 19-24 頁

［講演記録］明治・昭和三陸津波の歴史的教訓

山下 文男*

先ほど，東北大学の今村文彦先生がスマトラ沖地震によるインド洋大津波の映像を見せて下さいました．それを見て思うのですが，明治の津波は午後 8 時，昭和の津波は明け方の午前 3 時と，ともに夜のことでした．

想像するだけですが，いずれにしろ明治の津波の時も昭和の津波の時も，ともに凄まじい状況だったろうと想像します．

いや，昭和の津波などは寒い寒い氷点下 10 度という，厳寒の朝の闇の中での出来事です．もっと阿鼻叫喚で地獄絵のような状態だったでしょう．

かねてから私は，津波の特徴をひと言で言えばキラー・ウエーブ，要するに“殺人波”であり，しかもそれが大量殺人波であると言ってきました．

そして，この恐ろしい津波から逃げられるかどうかは，一分一秒を分ける時間との闘いであって，いかにして早く逃げるか，早く逃がすかが，究極の津波対策であると書いたり話したりしてきました．

先ほどのインド洋津波の映像を見ますと，単純ですがやはり結論はそういうことになります．

まず，明治の三陸大津波について触れます．全体として約 2 万 2 千人，うち岩手県だけでも約 1 万 8 千人が溺死しました．

岩手県の被害がいかに壊滅的であったか．流失，全半壊などの被害戸数は約 6 千戸でしたが，そのうち一人の生き残りもない全滅の家が 728 戸もありました．

当時，一家 5～6 人は少ない方で十人家族も珍しくない．中には十八人家族というのもあった．そういう時代の 728 戸が全滅したのです．

明治の津波で一家全滅したある裕福な家を，戦後になって受け継いで再興した人を私は知っていますが，そういう家はあちこちにありますし，全滅して家筋が完全に絶えてしまい，ただお墓だけが哀しそうに残っているという家もあります．

今，大船渡市内になっている地域の死者数を見ますと，被害地人口の 27%に当たる 3,255 人が死亡しています．

中でも旧綾里村（現大船渡市三陸町綾里）は，白浜[注 1)]の 38.2m をはじめ，小石浜で 11m，田浜で 10.6m など，各浜で 10m 以上の津波高を記録して，人口の 60%に当たる 1,350 人が溺死するという，惨憺たるものでした．

私の生家である綾里村石浜では，13m の津波によって 28 軒中，26 軒が流されました．また人口 187 人中，146 人が溺死して，生き残ったのは僅か 41 人だけでした．

41 人が生き残ったといっても，中には重傷者もいればお年寄りや子どももいますから，差し引き二十人前後の人で何倍もの死体を処理しなければなりません．

火葬というのは簡単なようですが，実に手間ひまのかかる作業ですから，あまりの多さにそれもままならない．葬式どころか，しまいには処理に困って周辺の麦畑などに穴を掘って埋めたのだそうです．

こんなことは私の綾里村だけでなく，三陸海岸のいたるところにありました．例えば山田町では，死体を発見したものの処理に困って，海岸にただ積み重ねているという記録があります．

釜石では石応寺の門前に七百もの死体が集められました．それが傷みが激しくてどこの誰かも分からない．「心当たりの者は引き取るべし」との，警察の立札が立てられているとの記録もあります．酸鼻の極みです．

津波による溺死体というのは，普通の海難事故による溺死体などと違って，まず津波によって地面に叩きつけられたあと波に翻弄され，あっちにぶっつけられたり，こっちに叩きつけられたりしますから傷みが激しいのです．

昭和の津波の時，私の家の庭に運ばれてきたあるお婆さんの死体なども，とても見られたものではなか

* 〒022-0211 岩手県大船渡市三陸町綾里石浜八ヶ森 75
本稿は，東海新報社（本社：大船渡市）のご厚意により，同社発行の「東海新報」に掲載された連載コラム「歴史地震研究発表会公開講演より」（2006 年 10 月 27 日～12 月 8 日）を本誌向けに組版して転載したものです．

ったと，母が言っておりました．

麦畑に埋めたところでは，のちに七回忌などの折に墓を造って埋め直したり，法事を行ったりした家もあったようですが，結局，そのままになってしまった死体も少なくなかったようです．

さて，このような悲惨極まりない大被害になったのは，主として二つの悪条件が重なったからです．

一つは綾里の津波高 38.2m でも分かるように，元々が巨大津波であったこと，そしてリアス式海岸の特徴で，一般に民家は海抜せいぜい 2，3m 程度の高さしかない狭い低地に密集していたことです．しかも今では想像もできないような，ちっちゃな杉皮葺きの平屋です．

例えば，あの田老村では海抜 1.3m，釜石では 1.5m，唐丹村本郷では 2m，綾里村港地域でも 1.5m といった低い所に密集していました．

そこに 10m 以上もの大津波が覆い被さるようにして押し寄せて来たのですから，ひとたまりもなかった．これで被害が大きくなりました．

そこで教訓となったのが，『津波かるた』でいう「高い所に津波なし，低い所に家を建てるな」ということです．けれども当時は，海に近くなければ漁業ができませんし，先祖代々の屋敷に対する執着もあります．

それに，津波は一生に一度あるかないかで，度々あるものでもないとして，再び元の屋敷に家を建ててしまった．そして 37 年後，またまた大津波のために根こそぎ持って行かれてしまう．

そこで，「お前たち，こんな馬鹿なことをいつまでやっているんだ」という，今村明恒という偉い地震博士の指導や国県による援助もあって，昭和の津波後，岩手県だけでも合わせて 3 千戸が背後の野山を L 字型に切り拓いて高所に移転しました．これで三陸海岸の集落の住宅地図は一変したのです．

第二の悪条件は，その巨大津波は震度 2～3 という弱震のあとで襲ってきた，いわゆる「津波地震」，俗に言うところの「ぬるぬる地震」「スロー地震」「ゆっくり地震」だったのです．

学者の方々は“好み”によっていろいろ名を付けて呼んでいますが，揺れは大したことないけれど，大津波を発生させる“専門家”のような，意地の悪い，恐ろしい地震による津波だったために，完全に不意打ちを喰ってしまったことです．

揺れの小さな地震の割に不相応に大きな津波を発生させる，この種の「津波地震」が発生する確率は全体としては約 10％と言われていますが，三陸海岸が向かい合っている日本海溝付近では 30％前後と確率が高く，学者，研究者の方々から，その危険性が指摘されております．

それに加えて，津波監視システムが進歩している今日でも，津波地震を直ちに捉えて津波情報を出すとなると，まだ弱点を抱えていると言われます．津波予報の泣きどころ，盲点と指摘する学者もおります．

ですから，赤崎公園（大船渡市赤崎町）に設置されている津波記念碑の言葉「地震があったら津波の用心，津波が来たら高い所へ」という心構えは，非常に単純ですが，今後とも非常に重要になります．

その「地震があったら・・・」ということですが，たとえ揺れが小さく弱くてもということを忘れないでください．要するに「揺れの大小にかかわらず，地震があったら津波の用心」なんです．

さらに，ゆーらゆーらと船に乗って揺られているみたいな体感の，しかも長い地震には特に注意することです．津波地震の揺れ方の特徴だと言われているからです．

さて次は，明治の津波の 37 年後に押し寄せてきた昭和八年（1933）の津波です．津波の高さは，最高が明治津波の 38.2mに対し，昭和の津波は同じところで 28.7m でした．

これを反映して，流失や全半壊などの被害戸数は明治の約 8 千戸に対して，約 6 千戸でした．

従って，津波の最高と被害戸数は，明治の津波を 100 としますと昭和の津波は約 75 ですから，昭和の津波も明治津波ほどではないものの，かなりの大津波だったと言えます．

ところが死者数で見ますと，明治の津波の約 2 万 2 千人に対して，昭和の津波は約 3 千人ですから，100 対 13.6，つまり約 7 分の 1 にとどまっています．いったい何が不幸中の幸いをもたらしたのでしょうか．

季節，時間帯，事前の地震揺れなど条件の違いは幾つかありますが，一番重要なのは，明治の時の津波体験，教訓が生きていた，生かされたということです．

まず，どこの浜にも明治の津波を体験した賢い大人たちがいて，地震のあと「もしかしたら津波も？」と勘を働かせ，氷点下 10 度の厳寒にもかかわらず海岸に行って海を監視していました．

その人たちを何人か直接取材して話を聞きましたが，「ドテラを着たまま行ってみた」という人もいれば，

「俺はちゃんと着込んで（浜に）下がった」という人，さまざまでしたが．特に津波が来ると思った訳ではなかったと言います．

ただ何となく不安だった．一人か二人は「もしかすると津波も」ということは頭の片隅にあったんですね．ところが間もなく引き潮が始まった．

昭和三十五年（1960）のチリ地震津波の時は，いつの間にか潮が引いていって湾が空っぽになったと言いますが，昭和八年の三陸津波の時は，それこそガラガラと音をたてるようにして急激に潮が引いていったと言います．

チリ津波は四，五十分の周期でしたが，昭和の津波は 10 分から 15 分ぐらいの周期だった．周期というのは津波が押し寄せて来る時間的な間隔ですが，住民はこの引き潮を見て一瞬，声が出なかったそうです．

あるいは間違いではないか？しかし，見るともう沖の方から波が前かがみになってこっちに向かって来る．

「津波だ！」「津波だ！」

咄嗟に大声を張り上げ，集落に向かって危急を告げました．

津波の前には引き潮があるとは限りません．例えば日本海中部地震津波（昭和五十八年）の時，男鹿半島ではいきなり押し波で始まりました．昭和三陸津波の時は引き潮から始まった．

いずれにしても，そういう賢い大人たちがその集落にどれだけいたか？教訓が正しく語り継がれていたかどうかが，その集落での死者数に反映しているようです．

例えば，旧大船渡町では夜警（夜回り）の人が賢かった．消防団の方が二人でやっていましたが，震度 5 級の地震があった後，「これは津波が来るかもしれない」と直観して，鐘を鳴らしながら，細長い町の端から端までを走って住民に避難を呼びかけました．

そのため，旧大船渡町では死者 2 名にとどまっています．明治の津波では死者 110 人でしたから，その 50 分の 1 以下ということになります．この働きが評価され，のちにこのお二人は表彰されています．

一方，私の住んでいた旧綾里村では消防の夜警がいるにはいたけれども，（後で問題になりましたが）津波ということが頭になかったらしく海を監視していなかった．

が，よくしたもので，その代わり賢い漁師たちが何人もいて，浜ごとに海を監視していました．そして，いち早く津波の襲来を告げて回ったので，死者は 181 人．明治の津波の約 7 分の 1 にとどまっています．

今は釜石市になっている旧気仙郡唐丹村本郷にも賢い漁師たちはいたのですが，ある年寄りが無責任にも「津波の心配はないだろう」と言った．文章どおりだと「津波来るものに非ず」と．

それで「年寄りの言うことだから間違いないだろう」というので信用してしまい，結局，逃げ遅れた人たちがあった．その逃げ後れた一団が高い所にあるお宮を目指して我先にと走っていたのですが，先頭に立っていた人が躓いてしまった．

それで，後から続いていた人たちが将棋倒しになったところで，ごっそり津波に持って行かれてしまった．こういうこともあって唐丹村では綾里村の二倍の三百六十余人が溺死しています．

昭和の津波の時は，津波襲来の叫ぶ声を聞いた人たちの逃げ足も一般に素早かった．特にスタートダッシュ，瞬発力があった．津波の時はこれがたいへん重要なんです．最初にまごまごしてはいけないのです．

ほとんどの家で，明治の津波の時に人が死んでいます．五人，六人と死んだ家もある．その体験者がまだ沢山いたし，子どもたちはみんなその恐ろしい話を聞いていました．

こういう訳で，大人から子どもに至るまで，津波に対する恐怖心が染みついていました．それが“火事場の馬鹿力”になって突っ走ったのです．

私の家なども「津波だ！」の声を聞いて親子十人が家を飛び出し，山に向かって雪道を裸足で走ったのですが，もう親も子もありません．それこそ「津波てんでんこ」で，親でも子でも他人のことなどかまってはいられない．夢中です．

両親は津波の体験者でした．しかも辛うじて助かった組ですし，子どもは小さいときから，お婆さんたちが津波で死んだ話を聞いています．「死んだ赤ん坊を抱いたままだってさぁ．終いには，可哀相に自分も死んでしまったんだってさぁ」と．

こうして，津波というのは怖いものだと聞いていました．だから私たちは，子ども同士で遊んでいる時，ふざけて友達を脅かすのに，何と言ったと思いますか？「そら！ツナミだ！」と叫んだんです．

つまり，そこまで語り継いできましたので津波の恐怖が身に染みていたのです．恐ろしい津波が後ろか

ら追いかけて来ている．追いつかれてたまるか．死んでたまるか．そういう恐怖心の塊になって逃げたのです．

私が「津波との闘いは一分一秒を分ける時間との闘いだ」と言っているのも，そうした体験が身に染みついているからです．

さて，昭和の津波から既に七十余年．過信は禁物ですが，今では防波堤もあれば防潮堤もある．

そのうえ，最新技術による津波監視システムの開発，情報手段の進歩によって地震があると防災無線，テレビ，ラジオ，ホームページ，携帯電話によるメールと，ほとんどリアルタイムで津波情報が流れてきます．津波防災上，画期的なことです．

ところが，その情報の受け手である肝心かなめの住民の方はどうでしょうか？それがどうも芳しくない．2003 年 5 月 26 日の三陸南地震の時のことです．

この時，「津波による被害の心配はありません」と発表されたのは，地震の 12 分後でした．

後に岩手県立大学の牛山助教授らのグループが，その間における海岸近くの住民の対応について調査したところ，震度 6 弱の地震のあと，咄嗟に「これは津波が来るかもしれないと感じた人」が 91.5％にも上がりました．

この辺はさすがに三陸海岸のみなさんです．ところが，そのうち避難行動を起こしたのは僅かに 12.4％でした．

先ほど，気仙沼では 1.7％だったといいますから，それよりはかなり高かった．

それはその筈です．宮城県と岩手県では，明治の津波でも昭和の津波でも被害の程度にケタ違いのものがありましたから．

岩手県が宮城県における明治の津波の時の犠牲者は，岩手の約 1 万 8 千人に対して宮城は約 3 千人．昭和の津波の時には岩手の約 2 千 6 百人に対して宮城は約 3 百人．だから岩手の方が津波防災意識が高くて当然なのです．また，そうでなければ困るんです．

ところで，その残りの 80％弱の人たちは何をしていたのか？これが問題です．防災無線をはじめ，ひたすらにテレビやラジオにしがみついて情報を待ち続けており，「過度に情報に依存している実態が浮き彫りになった」と報告されています．

気象庁による津波情報のきめ細かさが，逆作用している面もあります．津波情報を流す時，テレビやラジオでアナウンサーが予想される津波の各地への到達時刻や波高を伝えます．「1 時間後に釜石で 20cm」とか「大船渡で 30cm」だとか．

これを聞いた住民は「まだまだ大丈夫」と，まるで相撲の行司か評論家みたいなことを言って，なかなか腰を上げようとしない．私は，そうした情報は必要がない，止めてもらいたいと思っています．「その程度なら，たいしたことはない」という自己判断になるからです．

それにしても何故，こんなことになってしまったのか．答えは簡単です．津波の恐ろしさを本当は分かっていないからなんです．津波を“なめて”かかっているんです．さらに突き詰めると，津波監視システムや情報システムの開発，進歩に比べて防災教育が甚だしく立ち遅れているからなんです．

そのため，せっかくの津波情報が必ずしも真剣に受け止められない．それどころか，当局者や研究者の意図に反して防災意識をマヒさせることにさえなっている．この点は，専門家の方々にもよくよく考えて頂きたいと思っております．

2004 年 9 月 5 日の夜，紀伊半島沖地震というのがありました．その時，気象庁は三重，和歌山，愛知の三県に津波警報を出しましたが，該当する沿岸 42 市町で避難勧告を出したのは 12 市町だけ．対象になる地域に住む沿岸住民 14 万人のうち，実際に避難したのは 8 千 6 百人と，僅か 6％にとどまりました．

この地震の後，たまたま三重県に行く機会があって，鳥羽市で話を聞きましたが，津波警報が発令されたあと，津波を見ようというので海岸に何人もの人たちが集まって来たそうです．

驚いたことに市長さんまでが見に来た．ご本人が言うのですから間違いないでしょう．けれども「市長さんがこんなところに来ていてはダメじゃないですか？」と，消防団の人に注意されて帰ったと言っていました．

そんな状態です．私はいつも「あれも不十分」「これも不十分」と文句ばかり言っておりますが，三重県の対応からみると三陸海岸，この大船渡の津波対応はまずは進んでいると言えます．

実際，その時の三県沿岸の自治体と住民の対応には多くの問題がありましたので，さすが東北大学の今村文彦先生（災害制御研究センター長）は新聞談話でこう語っています．

「情報さえ出せば住民が避難してくれるというのは幻想．津波の恐ろしさをきちんと伝えることが専門家の役割だ」

全くその通りであって，専門家の方々にはもっとも

っと津波の恐ろしさを伝える役割を果たして頂かねばなりません．私の考えでは，地震や津波の学者，研究者というのは，直接の専門分野が何であれ，防災についての啓蒙，啓発という共通の役割を担っているはずです．

地震学のための地震学ではなく，結局は防災のための地震学，今村明恒博士の言うところの「防災地震学」なんです．今村博士だけでなく「天災は忘れたころにやって来る」の警句で有名な寺田寅彦博士，東北大学の中村左衛門太郎博士など，昔の地震学者はみんなそういう使命感をもって研究に打ち込んでいたように思います．

今村博士などは住民の防災教育をたいへん重視し，一般の方々を対象とした講演会の時など，事前に近所の人や子どもたちを集めて話して聞かせ，自分の言わんとすることがちゃんと伝わるかどうか，理解してもらえるかどうかの意見を求め，何度も練り直し，噛み砕くようにして話して聞かせる努力を怠らなかったといいます．

会場の皆さんの後押しを得たつもりで，この際言いたいことを言わして頂きますが，今日の学者，研究者の方々は果たしてそうした努力をしているのでしょうか．肝心かなめの住民が理解できようができまいが，ただ「知るところを述べる話」に終わっているのではないかと，その点，私は不満でならないのです．

私のような，こんな考えや心配は「年寄りの冷水か」と思って，宮古市田老の防災のベテランに聞いてみました．すると，こう言いました．

「いやいや山下さん，きょうこのごろは色々なものがあり過ぎるんです．そのため情報にばかりに頼る傾向が強くなって，避難行動にかえってマイナス作用している面があります」

「それで，津波情報など何もなかった昔のように，危険を感じたらジャンジャン半鐘を打ち鳴らして避難を呼びかけるというように，もう一度原点に立ち返って津波防災を考えようという意見がこちらでも出ています」

「ところが，その半鐘がいま何処にいってしまったのかも分からなくなっています」

半鐘の在り処はいずれ探すとして，彼が言わんとしているのは，もっと本質的なことなんです．要するに，昭和八年の津波の時，あの厳しい寒さの中を誰に頼まれた訳でもないのに，海岸に下がって津波を警戒し，数多くの命を救った先人たちに学ぼうということです．

他力本願ではなく，我々の郷土は我々自身で守るという自覚と自主防災に徹しようということです．それでこそ，津波情報なども真剣に受け止められ，生かされると思うのです．

津波防災のための課題は多くありますが，地域防災百年の大計として，とりわけ重視しなければならないのは，未来を担う子どもたちに対する防災教育です．

津波は，災害間隔が長い代わりに風化も早い．津波の直後には，恐ろしいと言うけれども，年月を経るといつの間にか恐ろしさが忘れ去られてしまいます．

歴史地震研究会の会員一同はあす，大船渡市内にある幾つかの津波の遺跡を見学して回りますが，最初に訪ねる盛町洞雲寺の門前にある明治三陸津波の記念碑の碑文は，次のような言葉で始まっています．

「明治二十九年六月十五日という日は実に悲しく痛ましく，忘れんとしても忘れがたき日となりぬ．この日は旧暦の菖蒲の節句（五月五日）に当たればとて，津々浦々は親戚家族打ち集いて祝い興しつつありしを・・・・暗き沖の方青く光て，泡なせる高潮の山よりも高き波が打寄せ来たり・・・」

こうして，旧気仙郡内だけでも五千六百七十余人が溺死し，110 戸が一家全滅，たった一人生き残ったのは 130 戸でした．この惨事を決して忘れてはならないと諭しています．

岩手県沿岸の集落の墓地を訪ねますと，命日が「明治二十九年旧五月五日」と刻まれているお墓が少なくありません．五人も六人も名前が並んでいる墓もある．それほど多くの人が死んだということです．研究者には記念碑よりもこの墓を見てほしいと思います．

その明治の大津波から 110 年．現在の五月五日は『こどもの日』として天下公認の祝日になり，節句の祝いもちゃちではありますが，一応，昔どおりに行われています．

私の住む綾里地区の定置網などでは大漁祈願のお恵比寿さま参りをしたあと，宴会となります．しかし，節句のお祝いはしても，この日が一瞬にして二万余の命を奪った明治大津波の日であることに思いを馳せ，お神酒を飲む前に津波で死んだご先祖のために線香の一本もあげようかということにはならないようです．

津波に対する恨みも，恐怖の記憶も，それだけ遙

か彼方に行ってしまったということです．哀しいではありませんか．

たまには，計画的に追悼行事をやったり，こういう講演会などを開いたりして，思い起こしてもらう努力をしなければなりません．そして，少しでも風化に歯止めをかけるようにしなければなりません．

昨年でしたか，ある社会団体の主催による「津波体験と合唱の夕べ」というのが大船渡でありました．合唱といっても昭和八年の津波の際の「慰霊の歌」や「復興の歌」であり，全体としてたいへん有意義な催しだったようです．

その中で，招かれて「私の津波罹災体験」を講演された方の話の内容が新聞に出ていました．それによると，この方はパソコンを使って津波が来襲したあとの町の写真などを紹介してうえで，津波が地質に与える影響を説明していました．

そして，「津波は海から肥料を運んでくるなどの利点もある．ただ恐ろしいとだけ思わず，有効に役立てられることはないかを考えて復興に生かしてほしい」と，提案したとあります．

勿論，こんなことばかりを話したとは思いませんが，それにしても津波の直後，あるいは五，六年以内のことだったら，津波には「利点もある」などと話す人がいるでしょうか？

たぶん，チリ地震津波のことだと思いますが，この大船渡では全国一の被害で 53 人もの命が奪われているのです．

農地にしても，田植えを目前にした 77ha もの水田が泥海と化して耕作不能に陥っている．それが四十年以上経つと，もう「津波の利点」などという話になってしまう．よくよく考えると，これも哀しい話です．

一例を挙げましたが，その津波というのは，人間自身がその気になって意識的に，かつ継続的に努力をしなければ，どんどん風化していく災害なんです．その点，忘れる暇もないほど頻繁な地震そのものや年中行事のような台風被害などとは違うんです．

どうすればいいのでしょうか？根本は，子どもの時から将来を見越した防災教育です．国や自治体，さらには社会の責任として，この三陸海岸を襲った恐ろしい津波の歴史と知識を子どもの時分から学校教育など，様々な手段方法を使って身に染みつくように教える努力をすることです．

そして，津波防災についての，しっかりした知識と考えを持つ立派な大人に成長してもらい，地域防災の未来を担ってもらうのです．

以上，津波防災のためにやるべきことは沢山ありますが，その根本は「防災の心得と津波に強い後継者を育てること」．単純ですが，これに尽きるというのが私の考えです．

注 1)

原文では白浜（大久保）となっているが，大久保は誤りである（編者）．